

バラ名人の小早川さん

東広島市立平岩小学校

第2学年 松井 万桜

バラ名人の小早川さん

ひらいわ小学校 二年 まついまお

っしょくぶつは話せないけれど、生きてい

んだよ。

このことはは、バラをそだてておられる小早川さんのことはです。小早川さんは、地いきでゆうめいなバラ名人さんです。生活科のベんきょうで学校に来てもらって、バラについて教えてもらっています。

小早川さんは、バラをさわっているとき、

バラと話をしていると、言われていました。バラは話せないけれど、その分はの色を見たりねっこのようすを見たりしてバラはどうしてほしいのかをそうぞうしながらお話するのだそうです。それは、人に思いやりをもってせをするのとおなじで、しょくぶつは生きていくのだと言われ、とても心にのこりました。小早川さんがバラをそだてたいと思っ、たきかけは、バラはそだてるのがむずかしいと人から聞いたから、だそうです。小早川さんは

バラについていろいろなことをしらべ、バラをそだてるのはむずかしいけれど、それとおなじくらいバラのよさもいっぱいあることに気づき、育てたいと思っただけです。三年くらい、バラについてけんきゅうされたと聞きました。

バラをそだてる時につかう道ぐの話もしてもらいました。ぜったいにいけない道ぐはまほうの手ぶくろです。まほうの手ぶくろは、どうぶつのかわでできていて、それだとげのあるえだをさわつてもいたくないのだと教えてもらいました。

そのあと、校ていの「ヒラワーガーデン」に行きました。「ヒラワーガーデン」は「ヒライワ」と「フラワー」を一つにした名前です。たくさんのバラをうえています。そのバラは小早川さんがそだててくださいます。バラをよく見てみると、小早川さんが言われたとおり、みどりのくまにはちくちくしたとげがたくさんありました。

「ぜったいにないといけないう道ぐ、まほうの手ぶくろをはめた小早川さんがとげを持って
「ぎゅっ」。

とつかんだら、みんなが

「わあ」。

と、大きなこえで言いました。小早川さんに
「いたくないの」。

と聞くと、

「ぜんぜんいたくないよ」。

と教えてくれました。それから、みんながま
ほうの手ぶくろをさわりはじめました。わた
しもさわりってみると、毛がふわふわしていて
気もちよかったです。色は、はだいろに茶色
がまざったような色でした。本当にどうぶつ
のかわでできているんだなと思いました。

バラをさわっているときの小早川さんは、
バラにお中になっっているように見えました。
すごくやさしいかおで、わたしたちにバラの
ことを教えてくださり、本とうにバラのこと
がすきなんだなと思いました。

わたしは、バラをこんなに近くで見たことは
ありませんでした。小早川さんに教えても
らって、バラにすぐきょうみかわきました。
わたしは学校の行き帰りに、小早川さんの
家のちかくを通るので、小早川さんのおにわ
のきれいなバラが見えます。秋になるとまた
きれいなバラがたくさんさくそうなので、見
に行きたいなと思います。わたしの地いきに
は、すごいバラ名人さんかいることがわかり
ました。ほかになんか名人さんかいるのかな
とわくわくします。

指導者の言葉

生活科「どきどきわくわく町たんけん」の学習で、地域のバラ名人である小早川さんを本校に招きました。作文にあるように、小早川さんはボランティアで校内の「ヒラワ－ガーデン」にバラを植え、育ててくださっています。この作品は、その小早川さんからお話を聞き、国語科「じゅんじょよく書こう」の学習でその時の気付きや思いを表現した生活文です。

本校で研究している生活科の学習と国語科の学習を関連させ、児童が心を動かす体験活動を行ったことで生まれた作品です。

国語科の「書くこと」では、「はじめ」「中」「終わり」を意識すること、事柄を整理し、読み手に分かりやすいように詳しく書くこと、会話文を使うことに留意して指導しています。この作品では、小早川さんの話したことの中から心に残った言葉や、みんなで思わず叫んだ言葉を書くことで、その時の様子が読み手に伝わるように工夫しています。名人のお話を聞いて抱いた素直な感想からは、作者の小早川さんへの憧れが感じられます。名人に出会えたことで、自分の地域がもっと好きになった作者の思いがよく表れた作品になりました。